

令和 2 年 7 月 1 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980032

氏 名 合 崎 京 子

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ランカスター (国名 イギリス)
2. 研究課題名 (和文) : 自閉症スペクトラム者のイデオロギーとコミュニケーションの関連性に
関する研究
3. 派遣期間：令和元年 9 月 26 日 ~ 令和 2 年 7 月 1 日 (278 日間)
4. 受入機関名・部局名： Department of Psychology Lancaster University
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

【派遣先で従事した研究内容】

本プログラムの期間中では、英国の社会文化が、自閉症スペクトラム当事者の言語使用にいかに関わっているか、以下 2 つの観点、1) 現地自閉症スペクトラム者の置かれている社会環境についてのフィールドワークや文献調査、そして 2) 自閉症スペクトラム者の参与する会話の収録と分析から調査を行った。1) のフィールドワークについては、全英自閉症協会ランカスター・モーカム支部や、大学の自閉症スペクトラムグループのグループミーティングへの参加、文献調査は、Autism Act(2009) 及び Fulfilling and rewarding lives: the strategy for adults with autism in England(2010) のテキスト分析を中心に調査を進めた。2) については、上述 1) のフィールドワーク中に調査協力者を募集し、会話収録を行った。

【研究状況】

1) に述べたフィールドワークから、英国の成人 ASD 者は、日本とは全く異なる診断のプロセスを歩むこと、この過程においては特に英国の社会保険制度の中核をなす、NHS(National Health Service) が大きく関わっており、その組織的複雑さにより、多くの人々が ASD の診断に至るまでに多大な障壁を抱えていることが明らかとなった。また文献調査からは、英国においては Autism Act という、ASD 者に特化した法律があるにも関わらず、それが十全に機能していないことを示唆した。現在 2) で収録したデータのトランスクリプト化を進めている。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

【研究成果発表等の見通し】

本プログラム採用中に、5. に記述した文献調査（英国の自閉症スペクトラム者を対象とした法令に対する談話分析）の一部を Diversity and Cognition in Dortmund U（ドイツ、ドルトムント、2020 年 2 月 5-7 日）にて発表した。また、9 月中旬に自閉症スペクトラム者のアイデンティティ構築に関する分析を Critical Approaches to Cultural Identities in the Public Sphere（フランス、ディジョン、2020 年 9 月 17、18 日）にて発表予定である。また、そこで頂いたコメント及び受入れ教授とのディスカッションをとおり、ディスコース系のジャーナルに投稿する予定である。

併せて、自閉症スペクトラムに関するシンポジウムなどにて、分析の一部を紹介し、これまでの研究成果をアカデミックのみならず、一般の人々とも共有する機会を設ける予定である。

【今後の研究計画の方向性】

5. でも触れたように、コロナウィルスに伴う外出制限、渡航制限などにより、本研究者は引き続き英国に滞在することを予定している。研究計画、特にデータ収集に関して今後大幅に修正、変更しなければならないという困難には直面しているものの、こういった状況を生かすことに計画をシフトしつつある。具体的には、生活の変化に対応しづらい人が多いと言われる自閉症スペクトラム当事者にとっては、特に被害の甚大であった英国における社会環境の変化は大きく影響している。こういった状況の変化の前後における、彼らの言語使用の変化にも着目することで、新たな研究の視座や論点が開拓できると考える。今後の具体的なデータ収集方法論については、オンライン調査も取り入れるといったことも含め、受入れ教授の助言も得つつ検討する予定である。以上により、自閉症スペクトラム当事者の言語使用と、彼らを取り巻く社会との関わりについて、調査を継続していきたい。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

【発達心理学及び研究遂行上の新たな知見の獲得】

在籍した、心理学部の受入れ教授や関連分野の修士レベルの授業を受講することにより、これまで得てきた自閉症スペクトラム、及びそれを持つ人に対する知識に加え、主に実験研究から得られた結果から導き出された知見を習得することができた。併せて受入れ教授や自閉症スペクトラムを研究する学部内の他の研究者とのミーティングをとおり、先行研究に関する信頼性の担保を行うことが可能となった。

また、英国の学術機関、特に心理学、生物学、医学など、人を対象として実験・調査を行う分野における倫理審査の厳格さや、数十ページに及ぶ審査書類の書き方など、これから研究者として備えておくべき素養を習得することができたのも貴重な財産となった。

【北イングランドの自閉症スペクトラム者とのラポール構築】

本研究では、自閉症スペクトラムの診断を持つ成人の会話とインタビュー動画収録が欠かせないが、そのデータ収集に参加してくれる調査協力者となる自閉症スペクトラム当事者を見つけることは、当初想定していたより困難であった。しかしながら、滞在当初から参加していた自閉症スペクトラム当事者会のメンバーや、知人を介して知り合った当事者との交流の中で、数名調査に協力してくれる人を見つけることができた。これも、短期の滞在では不可能であったと思われる点である。

【ローカルコミュニティの実態の把握】

5. に述べたとおり、自閉症スペクトラムをめぐる社会環境や医療システムが日本と大きく異なることは、現地に滞在し、フィールドワークを実施しなければ成し得なかったことである。また数多ある自閉症スペクトラム者を取り巻く社会環境の中でも、どのような点を特に注視し今後の調査を進めていくのか、その指針を構築することができた。